

142

2023 AUTUMN

美術館NEWS



収蔵品の紹介 Vol. 13

難波仁斎《兔吹雪霽》
昭和時代(20世紀)
漆、蒔絵
高さ7 × 胴径6.8 cm



岡山県立美術館
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

ウィリアム・モリスと中世主義、そしてビザンティン

橋村 直樹(主任学芸員)

19世紀後半のイギリスで芸術家、詩人、社会運動家などとして活動したウィリアム・モリス(1834-96)は、妥協のない美しいデザインと丁寧な手仕事を追求し、芸術と日常生活との統合を目指した「アーツ・アンド・クラフツ運動」を先導したことで有名だ。そのモリスのデザインした壁紙や織物(図1)、書物などを紹介し、彼の創作の軌跡を辿る特別展が、今秋、岡山県立美術館で開催される。

モリスの多方面にわたる活動とその成果については、欧米をはじめ日本の学者たちによってこれまで多角的に研究され、紹介されてきている。なかでも、モリスの創作と活動に大きな影響を及ぼした中世主義については、ほとんどのモリス研究において、程度の差こそあれ、もれなく言及されているとあっていいだろう。

確かにモリスは、幼少期から騎士道物語など中世のロマンスに夢中になり、カンタベリー大聖堂など中世の教会堂を訪れて魅了されていた。また、生涯の友人となる画家エドワード・バーン＝ジョーンズ(1833-98)と知り合ったオックスフォード大学エクセター学寮時代には、同大学付属のポドリアン図書館にバーン＝ジョーンズと共に通い、同館が誇る中世装飾写本コレクションを実見していた^{*1}。さらに、モリスに決定的な影響を与えたのは、美術批評家ジョン・ラスキン(1819-1900)の浩瀚な3巻本『ヴェネツィアの石』(1851-53)である。とりわけ、モリスが最重要とみなした第2巻第6章の「ゴシックの本質」については、晩年にこの章だけを抜粋してモリス自身による序文を付け、ケルムスコット・プレスから新たに限定本として出版しており(図2)、芸術と労働が一体となった理想的社会を説くラスキンの中世主義からモリスが大きな影響を受けていたことがよくわかる。加えてモリスは、オックスフォード時代にラファエル前派を知り、その中心的人物であるダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ(1828-82)にバーン＝ジョーンズ共々傾倒し、その審美的な中世主義の影響下にあった。その後バーン＝ジョーンズはロセッティに弟子入りし、モリスもロセッティと親しく交流して絵を学ぶことになる。

こうしたモリスの中世主義の中世が指しているのは、西欧中世であり、とりわけゴシックであった。しかしながら、これまでほとんど注目されてこなかったが、モリスの中世への眼差しはゴシックだけではなく、東方ビザンティンにも向けられていたことが近年の研究から明らかになってきている^{*2}。モリスがゴシックを超えて東方のビザンティン世界にまで視野を広げることができたのは、もちろん第一にラスキンの存在があったからである。ラスキンは、ゴシックを中世芸術の頂点とみなしてはいたが、それ以前のビザンティンの芸術についても深く理解し、大いに魅了されていた。ラスキンが早くも16歳で訪れたヴェネ



図1
《いちご泥棒》デザイン:ウィリアム・モリス、1883年
Photo ©Brain Trust Inc.



図2
ジョン・ラスキン『ゴシックの本質』1892年
明星大学図書館蔵

*1: フィリップ・ヘンダースン『ウィリアム・モリス伝』川端康雄・志田均・永江敦共訳、晶文社、1990年、39頁。

*2: J. B. Bullen, "The Byzantine Revival in Europe," in Amalia G. Kakassis (ed.), *Byzantium and British Heritage: Byzantine Influences on the Arts and Crafts Movement*, London and New York: Routledge, 2023, chap. 1 (ebook-Kobo).

ツィアは、ラヴェンナやシチリアのパレルモなどと共に、西欧において東方ビザンティン芸術が遺る数少ない都市のひとつである。なかでもサン・マルコ大聖堂は、ビザンティンの帝都コンスタンティノーブルにかつてあった聖使徒聖堂を模した5つの円蓋を戴くギリシャ十字形プランの建築で、内部がビザンティン式モザイク壁画で装飾された、まさに真のビザンティン芸術である。そしてラスキンの『ヴェネツィアの石』、特に第2巻では、ビザンティン建築や装飾の、ラスキンによる素描や水彩画が挿図となっていて、モリスはそれらを通じてビザンティンの芸術世界を深く知ることができたのであった。

また、東方問題と露土戦争の危機から、モリスは東方のコンスタンティノーブルやその地に象徴的にそびえるハギア・ソフィア大聖堂(図3)に関心を向けるようになり、1878年にはギリシャ系の友人アグレイア・コロニオ夫人にその写真の入手を依頼している^{*3}。そしてモリスは、1889年の講演「ゴシック建築」の中でビザンティン美術について言及し、ハギア・ソフィアについて「人類が作り出したものの中でこの最上の作品以上に美しいものはない^{*4}」とまで語っている。ハギア・ソフィアに対するこの称賛は、モリスの友人でアーツ・アンド・クラフツ運動にも深く関わり、1894年にハギア・ソフィアの本^{*5}を共著で出版した建築家ウィリアム・リチャード・レザビー(1857-1931)や、のちにビザンティン様式でウェストミンスター大聖堂を建てることになるビザンティン・リヴァイヴァルの建築家ジョン・フランシス・ベントレー(1839-1902)らを大いに刺激したのである^{*6}。

さらにモリスをビザンティンの芸術文化へと向かわせたのは、友人のバーン＝ジョーンズが1881年に依頼を受けたローマの城壁内聖パウロ教会におけるモザイク壁画のデザインの仕事を手伝ったことだった。バーン＝ジョーンズは、かつてイタリアでビザンティンのモザイク壁画に感動していたことから、かねてよりモザイクを試みたいと考えていた。モリスはバーン＝ジョーンズに誘われてモザイク壁画のデザインを手伝うことになり、その過程でビザンティン式モザイクについての知識を深めていったのである^{*7}。

このように、モリスがビザンティンの芸術文化に少なからず注目していたことは明らかではあるが、彼のデザインにビザンティンの直接的な影響を見出すことはなかなか難しい。しかしながら、例えば《いちご泥棒》の向かい合う平面的に処理された小鳥や左右対称の植物のデザインなどは、ビザンティンのモザイクや写本挿絵に登場する向かい合う鳥や装飾的植物文様から着想を得ているのではないかと考えられる。ともあれ、まずはモリスと東方ビザンティンとの関係を見逃さないことだ。そうすれば、モリスのデザインについて違った角度からの新鮮な解釈が可能となるだろう。

【特別展】「ウィリアム・モリス 英国の風景とともにめぐるデザインの軌跡」
(会期:2023年9月29日～11月5日)

*3: Ibid.

*4: William Morris, *Gothic Architecture: A Lecture for The Arts and Crafts Exhibition Society*, Hammersmith: Kelmscott Press, 1893, pp. 27-28.

*5: William Richard Lethaby and Harold Swainson, *The Church of Sancta Sophia, Constantinople: A Study of Byzantine Building*, London and New York: Macmillan, 1894.

*6: Bullen, op. cit. また、アーツ・アンド・クラフツ運動とビザンティンについての研究として註2のカキシス編の論文集に加えて以下を参照。Dimitra Kotoula, "Arts and Crafts and the 'Byzantine': The Greek Connection," in Roland Betancourt and Maria Taroutina (eds.), *Byzantium/Modernism: The Byzantine as Method in Modernity*, Leiden: Brill, 2015, chap. 3, pp. 75-101.

*7: Bullen, op. cit.



図3
ハギア・ソフィア大聖堂(現アヤソフィア) イスタンブール
筆者撮影

川島理一郎と岡山

洪 性孝(学芸員)

1988(昭和63)年の開館から35年を迎えた当館では、周年を記念した収蔵品展を開催した*。この展示では関係性をテーマに、できるだけ多くの作家を紹介することで、普段なかなか出品の機会に恵まれなかった作品も多く展示することができ、作家と岡山の意外なつながりなども改めて紹介できる場となった。本稿ではその一片として、川島理一郎(1886-1971)と彼の当館所蔵作である《物語》(図1)を取り上げる。

川島理一郎は栃木県に生まれ、アメリカの美術学校で学んだ後に1911(明治44)年にパリへと渡った。1913(大正2)年、日本人初のサロン・ドートンヌ入選を果たし、帰国後の1922年に会員に推挙される。1919年に帰国した川島は以降も頻繁に日仏間を行き来し、1925年に新設された国画創作協会の第二部(西洋画)同人に梅原龍三郎(1888-1986)とともに迎えられ、1937年には第1回新文展の審査員となり、その後も日展審査員や理事を歴任、1955年に和田三造(1883-1967)や大久保作次郎(1890-1973)、柚木久太(1885-1970)等と新世紀美術協会を結成している。

このような経歴を辿る川島だが、どのような縁で彼の作品が当館に収められたのだろうか。《物語》は川島が若い頃から抱えていた抽象画への志向を表出させ、明るい色調と単純化した自由なフォルムによる抽象表現へと舵を切った1960年代頃の作品である。この作品は当館が開館するにあたり、岡山県総合文化センター(現:天神山文化プラザ)から移管された約450点の美術作品のうちの1点で、額縁には「昭和三九年 谷口久吉氏寄贈」と記されている。谷口久吉(1889-1968)とは、山陽新聞社、山陽放送の社長を務め、1948年に日展の岡山誘致をおこなうなど戦後岡山の文化復興に大きな貢献を果たした人物である。総合文化センター時代の作品台帳には、川島が谷口に宛てた手紙が2通、資料として綴じられており、「拙作“物語”は文化会館へでも寄贈いたしたく、御都合よろしければ何卒御手続を御貴殿より御取り下されば幸甚に存じます」と記されている(図2)。2人がどの程度親しかったのかは不明だが、洋画壇の重鎮であり同世代でもあった川島とのつながりは、岡山の文化振興を目指す上で谷口には決して小さなものでは無かったと思われる。また川島にとっても谷口には心を配り、礼を尽くしていたことがその文面から読み取れよう。

ところで手紙の中の文化会館とはおそらく総合文化センターを指しているが、この施設は1962年の開館に至る背景として、天満屋以外に大きな展示場が無かった戦後岡山で、作品発表の場を求めて岡山の芸術家が団結して協議会を立ち上げ、建設運動をおこなったことがその一因となった。この時の協議会で会長を務めたのは現在の倉敷市玉島出身の柚木久太で、川島は県外顧問を引き受けている。川島と柚木は留学先のパリのアカデミー・ジュリアンで共に学んでおり、その後も新世紀美術協会をともに立ち上げたり、1967年に総合文化センターで開催された柚木久太画業60年記念展に川島が祝辞を寄せたりなど、良好な交友関係にあったことが伺える。

さて上述のように、人のつながりという観点に立った時、川島理一郎という画家は岡山と無関係ではない。だが一方で「郷土ゆかり」を収集方針に掲げる現在の当館において、果たして彼の作品が収蔵候補として挙げられるだろうか。今回の収蔵品展は、単に所蔵作品の理解を深めるだけでなく、美術館が作品収集を進める上で、その射程をどのように拡げ得るのか、改めて考える意味でも意義深い機会となったように思う。

* 岡山県立美術館 特別展
「開館35周年収蔵品展
CORRELATION—交流と
継承」2023年5月19日(金)
～7月2日(日)



図1
川島理一郎《物語》1963(昭和38)年
油彩・カンバス 縦91×横122cm

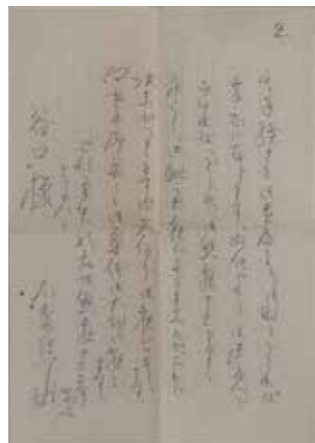
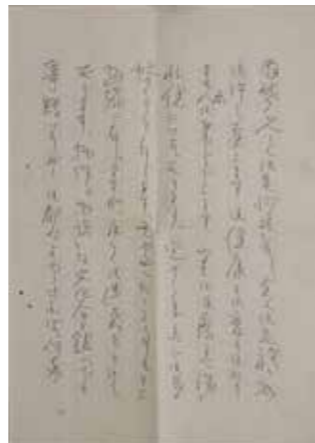


図2
1964(昭和39)年に川島理一郎が
谷口久吉に宛てた手紙

林皓幹遺品から考えること 大日本絵画講習会のテキストについて

鈴木 恒志(学芸員)



図1



図2

筆者は、当館館ニュース第140号や紀要第13号などで、日本画家・林皓幹の遺品の数々を再調査し、彼が日本画家となるまでにいかなる学習を行っていたかを探ってきた。そのなかで、特に実態を追究するのに困ったのは、明治末から大正初期に開講されていた通信教育・大日本絵画講習会に関する事項である。

皓幹遺品中には本講習会の卒業証書が存在するため、皓幹がこの通信教育を修了したことは間違いない。しかしその内容が具体的にどのようなもので、彼が何を学んだのかについては、これまで全く言及されてこなかった。というより、この講習会に関する先行研究は及川益夫氏による『大正のカルチャービジネス 絵画通信教育と広告イラスト』のほかにはほとんど見られず、その全貌がまだ把握できていないという実情があるため、そもそも触れることができなかつたと述べた方が正しいだろう。

皓幹遺品のうちには、従来からこの講習会に関する資料と目されつつも、その内容が精査されてこなかった2つの冊子がある(図1、2 以下図1をA本、図2をB本と呼称する)。これらは、件の通信教育で使用されていたテキスト『絵画講習録』の一部であると考えられる。大日本絵画講習会では、1年を修業年限として、毎月2回テキストが配布された。その中には、日本画を描くうえで必要となる器具から絵具の溶き方、描画の技法、日本の絵画史まで教授する本文に加え、毎号絵手本が5枚と、絵手本1枚ごとの解説文も綴じられていた*1。皓幹所持本のうち、A本は全24号分の『絵画講習録』本文をトピックごとに綴じ直したもので、B本は絵手本の解説文をまとめたものである。このほかに絵手本全120枚も冊子状に綴じていたかと思われるが、現存しない。なおA本の内容を確認すると、先の著書で及川氏が挙げる明治41年9月以降のテキストと教科数・教科名・頁数とも一致する*2。ただし、同氏が示す絵手本の画者名および画者ごとの掲載数*3と、B本所収の各解説文とを比較すると、どちらも総計120枚であることや画者名に変更はないが、それぞれの掲載数に異同がある(例として、及川氏は山元春挙の絵手本数を10件と報告するが、B本では春挙の絵手本解説文が13件確認できる)。及川氏は同著で、『絵画講習録』は発行年が変わっても本文に変更が行われていないことを指摘しており*4、これは確かに皓幹所持本に照らしても相違ない。ただ、絵手本として誰のどの図を何枚採用するのかという点に関していえば、こういった事情があったかは不明だが、この通信教育主催者による変更があった可能性が指摘できよう。

以上は、皓幹遺品と先行例を比較して、大日本絵画講習会とそのテキスト『絵画講習録』について即座に分かったことを述べたに過ぎない。この具体的な内容に関しては、及川氏の著書を含めほとんど触れられておらず、今後さらに分析が必要となる。また改めて紀要等で発表していきたい。

*1: 及川益夫『大正のカルチャービジネス—絵画通信教育と広告イラスト』皓星社、2008年5月、29-33頁

*2: 註1前掲 31-33頁

*3: 註1前掲 30頁

*4: 註1前掲 28-29頁

新収蔵品紹介

File 24

築山弘毅

《say hallo wave good bye》

古川 文子(学芸員)



《say hallo wave good bye》2018 パネルに顔料、金属箔、金属粉、合成樹脂

築山弘毅は、1983年岡山県津山市に生まれ、高校を卒業後に上京、東京藝術大学絵画科で日本画を学ぶ。2011年に東京藝術大学大学院美術研究科日本画を修了し、ドイツに留学、2017年シュトゥットガルト美術アカデミーのホルガー・ブング教授クラスを修了、2019年にシュトゥットガルト美術アカデミーマイスターシューラーを取得した。同年3月に第12回岡山県新進美術家育成「I氏賞」大賞を受賞し、現在は郷里である津山市を拠点に制作活動が続いている。渡独直前の2011年3月に東京で東日本大震災を体験し、連日報道される津波や原発事故の映像と、米ドル円の為替相場の激しい変動を目の当たりにしたことをきっかけに、人々の感情や思惑を映し出す為替や株式相場のチャートを現代社会の記録として描く独自の「歴史画」制作に取り組む。

本作は、第12回「I氏賞」大賞受賞時の出品作。独特の深みをもつ画面には、日本の伝統工芸である漆芸の蒔絵技法に想を得て、塗料を流し込み幾重にも重ねた色層を砥ぎ出し磨き上げる手法が用いられている。重厚なマチエールを背景に、金属箔と金属粉で描き出され

ているのは、築山の制作の契機となった東日本大震災前後の為替相場のチャートの図式である。ドイツ留学中に築いたスタイルの集大成として制作した作品で、「VEHEMENT!」(マイスターシューラー課程修了制作展 州立シュトゥットガルト美術アカデミー 2018年11月13日~25日 会場: ヴィラ・メルケル美術館/ エスリンゲン、ドイツ)で発表した。上図は、帰国後の2020年に津山市のPORT ART&DESIGN TSUYAMAで開催した個展「価値の記憶」での展示風景。赤煉瓦の歴史的建築空間の中、高さ2メートル幅4メートルもの四曲一隻の屏風形式による大画面が、現代の「歴史画」としての存在感を示していた。昨年度末に当館の収蔵となり、本年度の特別展「開館35周年収蔵品展 CORRELATION—交流と継承」において、第12章「I氏賞」コレクションとして、ご紹介したところである。

展覧会スケジュール

9月
September9月6日|水| - 9月17日|日|
第74回 岡山県美術展覧会10月
October9月29日|金| - 11月5日|日|
【特別展】
ウィリアム・モリス
英国の風景とともにめぐるデザインの軌跡

19世紀の偉大な芸術家・詩人・思想家などとして知られるウィリアム・モリス(1834-96)は、産業化が進んでいた当時の英国において、妥協のない美しいデザインと丁寧な手仕事を追求し、芸術と日常生活との統一を目指した「アーツ・アンド・クラフツ運動」を主導しました。本展では、「モダン・デザインの父」と称されるモリスの制作活動に深く関係する「住まい」と「学び」、そして「働いた場所」に焦点を当て、そのデザインの軌跡をたどります。

11月
November11月11日|土| - 12月10日|日|
【岡山の美術展】
第13回 I氏賞受賞作家展
平子雄一・工藤あゆみ【岡山の美術展】
もっと伝統工芸(陶芸) 米田和
【岡山の美術展】
生誕140年 清水比庵展11月16日|木| - 12月3日|日|
【特別展】
第70回 日本伝統工芸展 岡山展

*新型コロナウイルス感染拡大に伴い、会期やイベントなどが変更になる場合がございます。最新情報は岡山県立美術館HPをご確認ください。
<https://okayama-kenbi.info>

10月1日|日| 14:00-15:30
記念講演会 「ウィリアム・モリスの歴史と現在」
講師 藤田治彦氏(大阪大学名誉教授)
会場 2階ホール(当日先着220名) ※要観覧券(半券可)10月21日|土| 14:00-15:30
美術館講座 「ウィリアム・モリスと中世趣味」
講師 橋村直樹(当館主任学芸員)
会場 地下1階講義室(当日先着50名) ※要観覧券(半券可)収蔵品の紹介
Vol. 13難波仁斎
《免吹雪棗》昭和時代(20世紀)
漆、蒔絵
高さ7×胴径6.8cm

丸い背中をこちらに向け、ちらりとふりかえる、物言いたげな赤い目が印象的だ。本作を制作した仁斎は1903年生まれで、干支でふたまり、生誕120年を迎えた。1903年といえば、ホイッスラー、ゴッゲン、ピサロが亡くなった年(彼らは没後120年)、同年生まれには、小磯良平、棟方志功、平田郷陽、岩橋英遠、三岸好太郎、金子みすゞ、草野心平、ロスコ、アドルノ、瀧口修造らがいる。岡山ゆかりの志功や郷陽、仁斎らの仕事を振り返りつつ、同時代を生き、今日の近現代史を築いた人たちにも思いを馳せる。(福富)

酷暑の日々

守安 収

この夏の暑さは異常です。いやいや、これからは平年並みとなるのでは…。当館では只今、「美をたどる 皇室と岡山～三の丸尚蔵館収蔵品より」を開催中。内容は十二分にご満足いただけるものなのですが、来館者数は今一步伸びません。街中を歩く人が少なく、車の通行量も減っています。何しろ朝のニュースが不要不急の外出は控えてくださいと連呼する事態ですから。美術館は不要不急？と突っ込んでみても、殊に高齢の方々に対してどうぞ来てくださいとお誘いにくい暑さです。夏休みは美術館の書入時という考えを改めるべきかもしれません。▼さて、一日中冷房をつけっぱなしの自宅の電気料金も怖いのですが、美術館のお財布も心配です。来館者の快適な鑑賞と作品保存の環境を整える空気調和(空調)は、館にとっては一番の生命線なので、これを適正に維持管理することが最優先事項となります。当館の熱源はほとんどすべてが電気(喫茶のみ都市ガス)です。空調は夜間電力を利用して一年中氷を作り(氷蓄熱)、それを溶かすエネルギーで賄っています。35年前に設備費は高くても電気代は格安になるというこのクリーンで斬新なシステムを導入し、これまで恩恵を受けてきました。しかし、30℃超は年に数回であった当時の外気温が、現在は高温続きで想定外の領域に突入し、氷作りに難渋する状況です。昨今の電気料金高騰も加わり、ダブルパンチが痛い痛い。今年の初め、東京国立博物館長が電気代不足によって収蔵品に危機が迫っていると声を上げて話題になりましたが、私どもではそうした事態が起こらぬよう展示・収蔵部門を除いて節約に努めながら県当局の理解を得て対処する覚悟です。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
<https://okayama-kenbi.info>

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩約3分
・宇野バス 四御神、瀬戸駅、片上方面「表町入口」下車徒歩約3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ
・循環バスめぐりん 益野線「表町入口」下車徒歩約3分

開館時間 9:00—17:00 (入場は閉館時間30分前まで)
夜間開館日は19:00閉館

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

編集後記

中西ひかる

秋の特別展として、本誌の見開きにも掲載されている「ウィリアム・モリス」展が9月29日より開幕しますが、それよりも一足先に、6日から「岡山的美術展」が2階展示室にて始まります。季節にあわせた収蔵品はもちろん、特別展に関連した展示もあり、芸術の秋をよりお楽しみいただける内容になっております。今年も、まだしばらくは厳しい暑さが続きそうな予感がありますが、美術館巡りがはかどる季節がもうすぐそこまできています。「岡山的美術展」は特別展チケットでもご観覧いただけますので、ぜひ当館へお足運びの際は、両展示ともにご堪能ください。